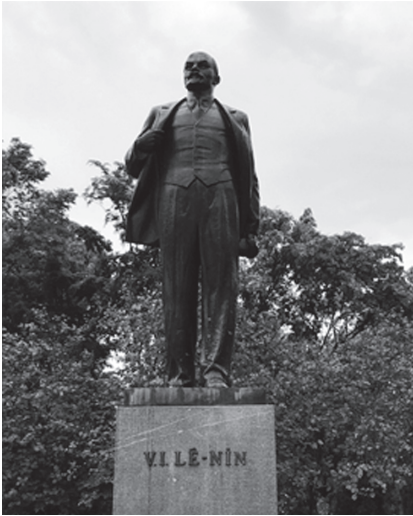


レーニンから始まる旅



ハノイのレーニン像。筆者撮影。

藤井 光

1.

ニールス・アッカーマンとセバスティアン・ゴベールが2017年に発表したフォトエッセイ集『レーニンを探して』(*Looking for Lenin*)は、ウクライナ各地で引き倒されたレーニン像のその後を追うなかで、ウクライナ社会の現在地点を浮き彫りにする試みである。その写真集に寄せた序文で、ミロスラヴァ・ハートモンドは、かつてはウクライナ全土に約5,500体あったレーニン像が、今ではひとつ残らず撤去されてしまったことに触れつつ、レーニン像が「崇拜の焦点であり、共同体はそこに集合的な永続という幻想を投げかけていた」(10)と説明する。その像が残らず引き倒された「レーニン倒壊」(Leninfall)後の何もない台座は、ハートモンドによれば、「国家的な表象は何であるべきかについて争い合うビジョンの収束点であり、『次はどのようなのか?』という問いを投げかけてくる」のだ(11)。

その問いを追いかけるようにして、アッカーマンとゴベールはウクライナ各地でレーニン像の残骸を写真に収めていく。ときには民家の壁の奥にしまいこまれ、ときには台座の上にレーニン像が無傷で残っているか、と思いきや、それはダース・ベイダーの像だったりもする。共産主義の理想を体現するレーニンが、ダース・ベイダーというアメリカ資本主義の象徴に取って代わられていることは、時代が下るにつれて大きく変容していった社会全体の空気を自虐的に証言している。

2.

時代の変化を自虐的に浮き彫りにする東欧の物語ということであれば、ブルガリア生まれの英語作家ミロスラフ・ペンコフの短編「レーニン買います」もまた、レーニンをめぐる展開される世代間の価値観の溝を浮き彫りにする物語である。共産主義体制が崩壊してもなお、レーニンの掲げた理想を信じ、レーニン全集を朗読している祖父と、英語の勉強にのめりこみ、やがてはアメリカ留学のチャンスをつかんで旅立っていく孫。そのふ

たりのやりとりは、冒頭から大きくすれ違いつつ、確かに存在する愛情も物語っている。

僕がアメリカに留学すると知ると、祖父はお別れの手紙をくれた。「この資本主義者の腐れ豚め」と、そこには書いてあった。「無事な空の旅を祈るよ。愛をこめて。祖父より」。一九九一年の総選挙のときの、折り目つきの赤い投票用紙に書かれていた。祖父の投票用紙コレクションのなかでも指折りに大事なものだったし、レニングラード村のみんなの署名もついていた。そんな荣誉にあずかって、僕は感動した。そこで椅子に座り、一ドル札を取り出すと、こう返事を書いた。「この共産主義者のカモめ、手紙をありがとう。明日に出発するから、着いたら超スピードでアメリカ人女性と結婚してみせるよ。アメリカ人の子どもをたくさん作ってみせるさ。愛をこめて。孫より」(78)

共産主義の理想を信じる祖父は、1990年代のブルガリアに満足できず、やがてソフィアから故郷の村に戻ると、地元の老人たちと「レニングラード村」を結成し、共産主義時代のグッズ集めに精を出す。一方の孫は、そんな祖父に辟易し、期待に胸を膨らませてアメリカに向かう。ふたりには、およそ接点などないかに見える。

「アメリカにいるべき理由なんて、別になかった。故郷での僕は、少なくとも腹ペこで死にそうだったわけじゃない」(78)と、留学した理由について語り手は言う。1989年以降の政治と経済の混迷のなかで、チャンスがあればブルガリアから出ていくという選択をする人々は珍しくはない。その彼にとっては、祖父が信奉するレーニンは、自分が母国を離れた理由そのものだと言っていい。

祖父と孫の世代で価値観が断絶し、住む場所も離れ離れになった。それ自体はブルガリアでも旧共産圏でなくても、よくある話かもしれない。だが、「レーニン買います」はそれほど単純な物語ではない。孫はアメリカでコミュニケーションに苦勞し、友人関係を作ることができず、やがてはブルガリアにいる祖父との電話での会話を心待ちにするようになる。そんななかでも祖父に八つ当たりをしてしまい、反省した彼は、埋め合わせに共産主義グッズを贈ってやろうと、インターネットのオークションサイト大手である eBay を覗いてみる。

まさか、レーニンの遺体のオークションに出くわすとは思っていなかった。ソヴィエト社会主義共和国連邦創設者レーニン。新品同様、と書いてあった。ウラジーミル・イリイチ・レーニンの遺体に入札できます。遺体は非常に保存状態がよく、アメリカとヨーロッパどちらの電圧にも対応した冷蔵装置付きの棺に入っています。「今すぐ購入」ボタンは、五ドルちょうどを表示していた。海外への発送には五ドルの追加料金がかかる。売り手はモスクワ在住と書かれていた。(102)

レーニンの遺体が五ドルで売られているわけがない。だが、ブルガリアまで発送してもらったとしても、たかが十ドルの損にしかならないし、大事なのは気持ちを見せることだ。そう考えて孫は落札し、レーニンを購入する。

『レーニンを探して』に登場したダース・ベイダーと似た状況が、ここでは描き出されている。共産主義政治体制の始祖だったレーニンが、グローバル資本主義を象徴するようなオークションサイトで売りに出されているという展開は、祖父が信じる理想が現実との接点をまったく失っていることを証し立てているように、主人公には思っている。

ほどなくして、恒例の電話のときに、祖父は意外な話を始める。本当にレーニンの遺体が自宅に届いた、と。遺体に五ドル、送料に五ドル。物語のうへでは、実際にレーニンが叩き売られていた。その衝撃のなか、祖父はみずからの第二次世界大戦でのパルチザン体験の真相を語り始める。

実はな、私は追い詰められたわけでも、腹ペこで死にそうだったわけでもない。単に、それ以上我慢できなかつただけだ。男たちはトランプでいかさまをした。女たちは噂話ばかりだ。ヤギは私のガロッシュのなかに糞をした。三年後、森のその場所を訪ねてみたよ。自由になった目で、あの穴ぐらをもう一度見てみたかった。目印にしていたねじれた樫の木から二十歩数えて、入り口を見つけてはしごを降りていった。彼らはまだそこにいたよ。全員がミイラになっていた。戦争は終わったのだ、と誰も彼らに教えなかった。もう出てきてもいい、と誰も言わなかった。自分たちで出てくる勇気もなかったから、飢え死にしてしまったわけだ。私は糞みたいな気分だった。地面を掘って掘って、全員を埋葬したよ。そして自分に言った。人もヤギも、まったく意味もなく穴ぐらで死んでしまうとは、これはいったいどういう世界なのか？と。だから、私は理想が大事であるかのように生きた。そして、最後には本当にそうなった。(104-105)

祖父を理想に駆り立てた、現実の圧倒的な不条理さ。それを前にして祖父と孫は笑い出し、その声は回線上でひとつの声となって響く。ここでの祖父の体験談の冒頭に置かれた「腹ペこで死にそうだったわけでもない」というセリフは、孫の語りにある「少なくとも腹ペこで死にそうだったわけじゃない」という言葉とほぼ同じものになっている。世代が変わり、人を動かすものが共産主義からグローバリズムに変わったところで、実際には、それぞれの「体験」は本質的には変わらないのかもしれない。生きる舞台をブルガリアからアメリカ合衆国に変え、先行する世代を馬鹿にしていながら、孫の行動は祖父のときからあまり変わっていない。そんな自虐的なユーモアが透けて見えもするだろう。

こうして、単に過去の遺物でしかなかった祖父とその体験は、主人公にとってはみずからのアメリカ体験に重ねられるような同時代的なものに姿を変える。アメリカでの生活とい

う現実になかなかなじめない主人公が、なんらかの「理想」を見出すことになるのか、それは物語では明らかにはされない。

3.

祖父母の世代は何を体験したのか。孫の世代にとって、それは自分とはかけ離れているようでありながら、みずからの存在を理解するうえで埋めねばならないパズルの一部分でもある。祖父母が移民一世であれば、それはなおさらだろう。

モリー・アントポルのデビュー短編集『非アメリカ人たち』(*The UnAmericans*, 2014)のなかでも出色の出来を誇る短編「祖母が話してくれること」(“My Grandmother Tells Me This Story”)は、若いアメリカ人女性作家が、ベラルーシから移民してきた祖母の物語を書き取るという形式で展開される。

そもそもの始まりはヨーロッパだと言う人もいるし、あんたの母さんならきっと口を挟んできて、ニューヨークが始まりだと言うだろうけど、それはあの子が自分以前の世界を想像できないせいだよ。そうだね、あんたはベラルーシが話の始まりだと思っているだろうね。お祖父さんからそう聞いているだろう？ (59)

アメリカ合衆国生まれの二世である母にとっては、自分が生まれたニューヨークが家族史の「始まり」なのだが、書き手である孫はそこからさらに遡り、アメリカ以前の体験を聞き出そうとする。アメリカでの生活という枠組みを設定するかぎり、祖父は晩ご飯の後はいつも映画を見ると言い張って、途中からソファでうつらうつらする人であり、祖母は瞬間湯沸かし器のように短気な女性でしかない。それが「アメリカ人」としての彼らの姿なのだとしても、アメリカ以前にまで遡れば、まったく異なる祖父母の姿が見えてくる。ある意味では、孫にとって、未知なるものは未来にではなく、過去にある。

ベラルーシのユダヤ人だった祖母は、第二次世界大戦中にはホロコーストの手を逃れようと、街の下水道から森に逃げ込み、そこで少年少女によるパルチザン集団を結成していた祖父と出会う。「イディッシュ地下組織」(Yiddish Underground)と名付けられたその組織は、人目につかない森でキャンプを張りつつ、ゲリラ戦を繰り返している。そこに加わった祖母もまた、ある日、鉄道の線路を爆破するという任務に同行することになる。

その過程で、祖母は近くの町にいた貧しい母と息子から最後の現金を奪う。おそらくは、そのふたりが冬を越せなくなるだろうと承知の上で。みずからが家族を失った悲しみと憤りを、他人であるその母子にぶつけたそのときから、祖母はもう元には戻れなくなったのだ。

あんたは何がしたいのかね。小さいときからずっとこんな調子で、家族が集まるとなったら誰かしら隅に引っ張って行って質問攻めにするんだから。なかなか友達ができないのも無理はないよ。今日はいい天気じゃないか。お祖父さんは中庭でハンバーガーを焼いているし、お母さんはスピーカーをつないでひどいレコードをかけているよ。もうそろそろ日の当たるところに出て楽しんできたらどうだい？ 家のなかで座って、自分と関係のないことをあれこれほじくり回すんじゃないでね。この話は全部、あんたが生まれる前の出来事なんだよ。(84)

無口な祖父と短気な祖母に始まると思われた、「アメリカ人」としての家族史は、第二次世界大戦という歴史と絡み合っている。そこでは、迫害があり、抵抗と襲撃があり、収奪があり、誰もが暴力を振るわれると同時に暴力を振るってもある。そして、その出来事は、大洋と数十年を隔ててなお、祖母の「現在」に取り憑くことになる。

そのような家族史は、孫にはまったくかわりのないことだ、とアントポルの語り手である祖母は言う。ある意味では、そう言うことで、暗い歴史と孫の人生を隔てようとしているのかもしれない。だが、本当に自分は無関係なのだ、と信じられないからこそ、孫は祖母を質問攻めにするのではないか。あんたには関係がない、と祖母が繰り返す言葉で閉じられるこの物語で、孫は一言も発することなく聞き手に回っているが、その疑念は振り払われたようには思われない。

4.

まさに同じ問いをみずからに投げかけながら、レベッカ・マカーイはハンガリー人の祖母に思いを馳せる。第二次世界大戦中、ユダヤ人の知り合いを訪ねるべく、ブダペストのゲッターを密かに出入りし、戦後は反共産主義的な小説を書いていたというマカーイ祖母の作品のなかには、ルーマニアのモルダヴィア地方出身の男が、〈鉄衛団〉に射殺される場面があるという。そしてまったくの偶然ながら、マカーイの短編「これ以上ひどい思い」は、モルタヴィアの地方都市ヤンで〈鉄衛団〉が中心となって起きたボグロムを舞台としている。

私としては、その一致は継承された記憶なのだと、共感の、芸術性の、勇気の系譜をさらに示す、家系のさらなる裏付けなのだと考えてみたくなる。でも、先祖をひとり引き受ければ、すべての先祖を、人類史における重要な道徳の闘いにおいて間違った側に立った者までをも引き受けることになってしまう。奴隷の所有者、反ユダヤ主義者、フン族、臆病者たちも。問題はそれだけではない。遺伝的に受け継ぐ道徳性があるという

仮定は、ナチのイデオロギーの核心をなす誤謬だったのではないだろうか。(147-148)

「血」が人の精神を規定することなどない、という思いはあれ、家族の過去と自分が無関係なのだとは言い切れない。そして、祖母という先祖を引き受ければ、もう片方の存在である祖父を無視するわけにはいかなくなる。そうして、家族史を振り返るマカーイは、みずからの六歳の誕生日を再構成していく。その日の写真に写っていた祖父、ジョン・D・マッケイは、第二次世界大戦当時はヤーノシュ・マカーイとしてハンガリーに住んでいた。国会議員として反ユダヤ的な法律を起草し、成立させた。その過去は、アメリカで生まれた孫であるレベッカとは切り離された出来事に見えるが、自覚しないうちに、その出来事は彼女の創作に入り込んできているのではないか。「聴衆からひとりの男性が手を挙げて、どうして私の短編はすべて罪悪感をめぐる物語なのかと訊ねる。『それはいままで気がつきませんでした』と私は言うだろう」(272)。祖父が犯した罪がゆえに、孫は罪悪感という主題に回帰してしまうのだろうか。

孫であるマカーイは、祖母の勇気を受け継いだのか、祖父の罪を二世代遅れて償っているのか。そのどちらだとしても、それは、孫である自分自身が第二次世界大戦を舞台に選んで物語を作ることを正当化してくれるものなのか。ひとりの作家がみずからの来歴に抱え込んだオブセッションと、「災害ポルノ」との境界線は引きうるのか。過去と現在の関係性をめぐる探求は、結局のところ仮説、つまりは虚構でしかないのではないか。マカーイが祖母の思い出をまずはノンフィクションとして発表し、そしてフィクションの短編集のなかに再録したという事実が示すように。あるいは、祖父が写った誕生日の写真など、そもそも存在しなかったという事実が示すように。

歴史のなかで人は形作られる。家族のなかで人は形作られる。その言葉はいかにも常識的に響く。だが、ある「個」の選択はどこまでが主体的なもので、どこまでが条件づけられているのか。そのなかで物語は過去とどのどのような関係を作り出していくべきなのか。新しい時代に乗れ、別の国へ、さらには別の言語に旅立ったとしても、それでも振り払えない何か——ペンコフはそれを端的に「血」と呼ぶ——が、こうした作家たちを物語へと突き動かしている。

5.

2019年4月、ベトナムの首都ハノイ。南部解放記念日に合わせて訪れたレーニン像は、小雨のなか堂々たる姿を見せていた。ウクライナで引き倒され破壊されたレーニン像の末路などまったく知らないかのように。

市街には、大型ホテルそばの小路が歩行者専用のスペースとなり、キオスクほどの小型

書店が並んでいる憩いの場所もある。十ほどの小店舗のなかには、共産主義関係の書店もあり、レーニンの著作も売られてはいる。だが、周囲の書店に並べられた海外書籍の翻訳、あるいは英語の本の存在感は、レーニンをはるかに凌駕している。ハリー・ポッターやダン・ブラウン、フェイスブックの取締役として知られるシェリル・サンドバーグの『リーン・イン』などの英語の本が並ぶ。そして、主に海外留学のためにブリティッシュ・カウンシルが運営する英語能力検定試験 IELTS の対策本。フランス語の存在感は縮小し、着実に英語化が進みつつある現状を、そうした書店は雄弁に物語っている。

ハノイでは現在、小学生の時点から子供に英語を習わせる学習塾が流行しているという。そうして英語を身につけていく子供たちの祖父母はちょうど、ベトナム戦争を経験した世代でもある。戦争体験を抱えた祖父母たちと、英語を駆使して現代に適応していく孫たち。そのあいだの隔たりに気づき、取り憑かれた世代からは、また多くの物語が生み出されていくことになるのだろう。

引用文献

ベンコフ、ミロスラフ 『西欧の東』 白水社、2018 年。

マカーイ、レベッカ 『戦時の音楽』 新潮社、2018 年。

Ackerman, Niels, Sébastien Gobert. *Looking for Lenin*. FUEL, 2017.

Antopol, Molly. *The UnAmericans*. W. W. Norton, 2014.